

言葉の支え

石川町立石川中学校 3年 中島 美紅

「すごく丁寧に書いているね。今までのやつも見せてもらっても良い？」

三年生の春、そんな言葉を部活の顧問の先生からもらった。私はびっくりして思わず、「えっ」という言葉を発してしまった。

私は今、バレーボール部に所属している。同級生の部員は、私を合わせて十三人。でもユニフォームは十二枚。ユニフォームを着れない一人がマネージャーとして大会に参加することになった。そして私は、そのマネージャーとして大会に参加することになってしまった。

そのことが決まった時、私はすごく悔しかった。皆と同じ時間、一緒に決められた練習を行い、ほぼ毎日休まずに練習へ参加し、同じボールと向き合い、追いかけ続けてきた。それなのに、どうして。どうして皆と同じユニフォームを着れないのか。皆はユニフォームを着て、堂々と激励会で自分の背番号とポジション、名前が言えるのに。私だけが練習着に短パンで、自分で「マネージャー」と名乗り、礼をする。それがどれだけ悔しかったか。家に帰り、悔しさと悲しみの中で泣くということを何度も繰り返す日々が続いた。

私がマネージャーとして与えられた仕事は、試合の中の皆のサーブを記録するという仕事だった。サーブが入ったら丸、入らなかったらバツ、サービスエースは二十丸という書き方で教わった。そして私は、皆にとって分かりやすくなるように、バツの下に入らなかった理由が分かる印を付けることにした。

それからの私は、スムーズに次の試合に臨めるよう、荷物を持って素早く移動したり、試合中の皆を盛り上げるために大きな声で応援したり、声をかけたりした。すると、段々と皆からの「ありがとう」という言葉をたくさんもらえるようになった。皆が言ってくれた「ありがとう」という感謝の言葉は、私にとってすごく嬉しかった。ユニフォームがもらえないと分かった当初は、自分に対しての劣等感や、皆に対して「羨ましい」という気持ちを抱くこともあった。しかし、皆からの何気ない「ありがとう」のおかげで、少しずつ自信を取り戻すことができた。

ある日の試合中、もう一人の顧問の先生からその日の皆のプレーに関する相談をされた。私はサーブの記録や試合を見てて思ったことを基に先生と話した。そして、その話の内容を皆に伝えてくれた。その後に、その先生と私で話して

いる時に、私がふと、

「どうして私に相談してくれたんですか？」

と聞くと、先生は、

「だって美紅は試合について考えてくれるでしょ？」

と言ってくれた。その時の私は普通に

「あ、ありがとうございます。」

と言ってしまったが、心の中ではとてつもなく嬉しかった。先生がそんな風に思ってくれていたとは知らなかったからだ。その言葉のおかげで「もっと頑張ろう」という気持ちが私の中に芽生えた。

そして、その言葉をもらった数週間後、私が試合中にいつもの通り、サーブの記録をしている時に、冒頭の言葉をもらった。その先生は、私が三年生になった時に赴任してきた先生で、私が書いているサーブの記録の存在を知らなかった。だからきっとあの言葉は先生の率直な感想だったのだろう。でも、私にとっては記録に対しての素直な言葉をもらえた初めての出来事だった。あの言葉をもらえた時に、初めて「ああ、やってて良かった。」という気持ちを抱くことができた。

今まで、メンバーに欠員が出た時にユニフォームを着て大会に参加したこともあったが、自信を失いそうになる時もあった。そんな時にみんなからの「ありがとう」に助けられたり、ふと自分に対する劣等感を抱いてしまった時に先生達からの言葉を思い出したりと、私はたくさんの言葉に支えられてきた。今度は私が「言葉」で支える人間になりたい。